



写真上：本シメジを模した外觀。屋根に当たる柄は、左右色が微妙に異なる。建物左側1階が作家の作品を集めた「妖精の家」。写真下：全体的に丸いフォルムの自宅内リビング。室内にもキノコモチーフのランプや飾りガラスなどがある

が次々と出て…。設計士さん泣かせでした。そして、佐々木代表の夢をカタチにしたもう一人の立役者が佐々木代表の夫だった

の60人の作家の作品を集め、作品のレンタルボックス「妖精の家」も始めたこともあり、建物に実際に入ることができると魅力のひとつだからだろう。「本当は、テナント貸しのつもりで造ったんですが、奇抜すぎたので借り手がつかず、それなら自分でお店を」と。それが逆に功を奏したといえる。作家が作った作品は、キノコの小物も多いが、中には本シ

によって異なる風景が楽しめる。特に日没の景色は美しく、その景観に魅せられた音楽家が、日没の時間を指定してライブを行っているそう。大講堂は貸切予約がなければ、見学は可能となっているという。阿部学芸員は、「ここにはここにしかないぬくもりと歴史があります。そしてキノコベシジョン後は、全国的にも珍しい事例である美術館と公民館が一体となった建物となりました。これからもこの特性を生かし、ワークショップなどの多様な参加型学習や、地域の皆さまとの創造的な協働の機会をつくりながら、当館らしい施設運営を展開していきたいです」。

塩竈市公民館本町分室・塩竈市  
青葉区の青葉神社通沿いに、突如、巨大な本シメジが2本現れる。まるで絵本の世界が目の前に現れたような光景だ。木造3階建てのこの建物は、Seed'sの佐々木治見代表取締役の自宅兼店舗。佐々木代表は「キノコのフォルムが好きで、キノコ型の家にした」と思っていました。設計士さんとディスプレイを続け、10ヵ月、2018年12月に完成しまし

た」と話す。現在は福祉

いを馳せながら、自分なりの時間が過ごせる空間になるのではないだろうか。  
用具の販売とレンタルを経営する佐々木代表の元々の職業はフラワーデザイナー。デザインの仕事のため欧州に滞在した際、各国を周りさまざまな建築物も見てきたという。「ヨーロッパの建物は、日本のような画一的ではなく、それぞれが個性的でした。そのため自分が家を建てる時がきたら、普通の家は嫌だと思うようになりました。その思いが本シメジの家につながった。「本当はシメジの二コキノキとした形の家にしたかったのですが、消防法など問題

と話す。「私の夢を長年聞かせられてきた大工の夫が、キノコの家を造ってくれました」。  
その自宅内も佐々木代表のこだわりがいっぱい詰まっていた。洗面所や壁、扉は曲線フォルムでやわらかく温かい雰囲気となっている。またキノコ型のランプに特注のキノコ型取っ手を用い、屋上も照明やフェンスにも夢のある装飾がなされていた。自宅内も絵本の中のキノコの家の世界観そのものだ。「私の好きが詰まった家は、住んでいて本当に楽しい！」と佐々木代表は言う。  
しかし建設当初は、奇抜な家のため近所の方に受け入れてもらえないか不安だったと話す。それが今では「キノコの家」と柏木のランドマークにさえなっている感がある。それというのも、宮城県内外

## 絵本の世界から飛び出したような家

メジ型の建物からインスピレーションを受けたという建物をモチーフにした作品もあり、作家の創作にも影響を与えているようだ。

今後について聞いてみると、い

## 古くからの文化を現代建築で表現

2019年6月にオープンした、建物が木々と一体化しているかのような2階建て商業施設「イグーネ荒井（若林区）」。名前のとおり屋敷を風雪から守る屋敷林・居久根をモチーフにしている。

建物のオーナーである開園日ホールディングスの三浦良太代表取締役（開くと、社屋を建てる計画で現在の場所を求めた際、田園地帯の荒井地区には居久根が多くあった歴史を知り、荒井に造るならぜひ居久根をモチーフにしたいと考えたという。その思いを実現するために国内外で活躍する広島県在住の前田圭介氏に設計を依頼し、構想から3年後にできたのがイグーネ荒井となった。縦の柱に見えるのが居久根を表しているそうだ。

現在イグーネ荒井は、開日ホールディングスの広報部門と、カフェ、美容院、雑貨店が入っている。建物の周りを囲む木々は、居久根

つの日か隣接の土地（現駐車場）にも、夢のある建物を建てたいと言った。人々を笑顔にしてくれるアートな建物が、またひとつできることを首を長く楽しみに待ちたい。

をモチーフにしているだけあり、日本の四季が感じられるようにと、日本の林に自生する150種類以上の植物を使っているという。建物内部から外を見るところと、さら、日々時間帯や天気、春夏秋冬によつて異なる風景が望めることも魅力だ。三浦代表は「テナントであるカフェや美容院は、基本設計の時点から募集して内装についても一緒に協議しながら作り上げてきました」と言う。入居するテナントに箱を渡すのではなく、建物全体が調和して落ち着いた雰囲気を出している理由がみえる。三浦代表のその方針が、イグーネ荒井の価値を高めたことにもつながっているのだろう。

さらに三浦代表はテナントと一緒にさまざまなイベントをし始めた。特にアーティストとコラボをしたイベントは、アートな建物と相性もよく、訪れる人にも好評だ。「アーティストの作品を展



写真上：建物と木々が一体に見える外観。写真左下：三浦代表のお気に入りのテラス席。写真右下：ゆったりとした空間で飲食が楽しめるカフェ（写真は全てイグーネ荒井提供）

示販売というのではありませんが、私たちはそこから一歩踏み込んで、その作品やアーティストの世界観を、それぞれのテナントと協力しながら表現しています。例えばカフェではアート作品を展示しながら期間限定のメニューを作ってもらいます。それはアーティストにとつても刺激になるのではないのでしょうか。私たちを含めて3者が互いにリスベクトしていい影響を与え合っているのではないかと思います」と三浦社長は話す。

オープンして2年半、イベントについては手探り状態が続いているというが、ここでしかできない

ものを今後も展開し、訪れる人も何かしら新たな発見の場所を掘っていきたくて意欲的だ。

イグーネ荒井は、建物の周りを囲む木々が日々成長することや、内部でのアートイベントが繰り返されることで、まさに建物自体が成長していくようにも感じられた。

「建物にも人生あり。」

今回探訪の建物には、人を豊かな気持ちにしてくれる要素が詰まっていた。そして、建物は面白い！と思わせてくれる。たまには身近にある建物をじっくりと見ては、いかがだろうか。